

序文

人間が自然環境に甘えきって、生きてきた時代は終わった。好き勝手なことをやって、その後始末は、火を着けて燃やしたり、水に流して浄めてしまえばそれでお終い、としてしまい、考えてみれば炭酸ガスと海洋汚染による自然破壊を人類発生以前からつづけて来たことになる。

当時は、その量も微量だったし、懐の大きな自然は太陽エネルギーによって、再び樹木を繁茂させて、人間の与えた傷跡を消して呉れてきたが、木材利用の時代から、鉄などの金属を利用する時代になると、傷跡は容易に癒されなくなってきた。製鉄用炭を作る薪を培養する面積を確保し、採木したあと、植林を行って順次生育したところを伐採していき、何年後かに初めの状態に戻る、と云う計画的燃料保養を実施したところもあったのであるが、ギリシアのように、大船を建造して大きな樹木がなくなり、結局、国が衰退するようなどころも出てきたのである。

決定的な崩壊は、石油石炭を燃料として利用しはじめたことから起こった。石油石炭は、有史以前に充満していた炭酸ガスを喰べまくった珪藻と羊歯類が土中に埋まり、炭素分を主にした残留物が形成したものである。

これを利用することは、地中に捉えられた炭素ガスを再び地上空中に解き放つことに他ならない。幸いにして、再び空中に放たれた炭素ガスは海中に溶け、還元されて水加メタンになることが判明した。若し、これがなかったら、動物はとうの昔、窒息死していたと考えられる。それ程、大量の石油石炭を人類は燃やしてしまったのだ。

もう海底はメタン水加物で一杯、時々吹き上げては爆発を起こすと云われる。何れにせよこの石油石炭の見境のない消費が、今人類を危機に追い込んでいる、と云えそうである。

石油石炭は、殆ど再生不能である。核燃料となると殆ど全く再製不能であるから、これらを消耗することは、子孫を苦況に追い込むことになるので、厳に慎まなければならない。

水力発電エネルギーは、未だゆとりがあるので、これまで利用されなかった遠隔地での発電電力を直流送電線を敷設して輸送し活用すれば、十分に全世界を養うことができる。

幸いにして、電圧を変圧可能な長距離直流送電が可能になったので、全地球をネット化して有無相補えば、安定化も出来て、益するところが少なくない。

災害用緊急用に最も適しているのが原子力で、高速増殖炉を利用すれば、日本の全エネルギーはウラニウム 100 トンで済む、という魅力を持つ。然し、燃料は再製不能と云えるから、成る可く温存を考えるべきであろう。

エネルギーについて少々述べたが、エネルギーは直接炭酸ガスと連動しており、また、水や食料などと、更には環境全体と深く結びついている。これらの関係をしっかりと究明し、我々人類の生存に更に加えて考慮してゆかねばならない。正にこれが環境設計であり、環境経営なのである。

幸いにして、我国では山本義一先生が昭和 34 年以前に炭酸ガスの急増について警鐘を鳴らされ、これが世に云うレーチェル・カーソンの「沈黙の春」出版の一年以上前である、と云う先見

性を発揮しておられる。不幸にして、その後を継承して発展させる人が出なかったが、これを世界規模で発展させて行くことは、我々の子孫に対する義務ではないだろうか。

宮崎修行先生はその雄たるもので、数理経済におけるように熟成不十分を過信して失敗する愚もなく、三田和美会長と共に、今後のこの分野を牽引する役目を背負っておられる。先生の研究開発チームが環境経営学会の支援を受けて、今後、この新たな環境影響評価指数 JEPIX による科学的な環境影響評価を、広く産業界に普及させることを願うものである。

環境経営学会名誉会長

元東北大学学長、首都大学東京学長

西 澤 潤 一